

# 白藤・新宿 C1・C2

—昭和56、57年度調査の概要—

柏川村教育委員会  
1983

## 序

柏川村には、数多くの古代の遺跡があります。そこからは、発掘調査を経ることによって、おもいかけなかった古代の遺産が見出されることがあります。今回の轄地区の調査では、数多くの古墳が発掘され、今までになかった馬の埴輪などが多数発掘されています。私達は、これらの遺物を単に興味本位にながめていくのではなく、これらの遺跡や遺物を通して、古代の人間の姿を見つめるとともに、現在の私達の姿を顧みることを忘れてはならないと考えます。この貴重な文化財がよりよい方向で保護され、保存され、そして、村の内で活用されることを望むしたいです。

今回、まだ、十分な報告とはいきませんが、その概要の一端を報告するとともに、この発掘にさいして御協力いただいた各位に対して感謝申し上げて序といたします。

柏川村教育委員会

教育長 金井久雄

## 目 次

I 発掘調査に至る経過	1
II 発掘調査	3
(1) D, I, J 区の調査	3
(2) E, F, K, L 区の調査	6
(3) A, B, F, G, H, L, M, N 区の調査	10
(4) P, V 区の調査	20
(5) Y, Z 区の調査	26
III 成果と問題点	28

## 例 言

I 本書は昭和57年度県官園場整備に伴う緊急発掘調査として、柏川村教育委員会が、昭和56年度文化財保存事業費国庫補助金、及び県農政部委託金の一部、昭和57年度文化財保存事業費国庫補助金及び県農政部委託金を使用して行った轄地区、白藤・新宿遺跡の発掘の概要を示したものである。
2 発掘調査は、昭和56年10月より昭和58年2月まで実施した。
3 発掘調査は柏川村教育委員会の直営事業とし同教育委員会社会教育係文化財担当主事、小島純一が担当し、本書の執筆、編集も小島があたった。

## 挿 図 目 次

第1図 昭和57年度調査遺跡の位置	1
第2図 白藤・新宿遺跡周辺地形図	2
第3図 D, I, J 区発掘全体図	4.5
第4図 E, F, K, L 区発掘全体図	6.7
第5図 A, B, F, G, L, M 区発掘全体図	10.11
第6図 B, G, H, M, N 区発掘全体図	12.13
第7図 北部、西濠実測図	16
第8図 北部、北濠橋脚部分実測図	18
第9図 P, V 区発掘全体図	20
第10図 Y, Z 区発掘全体図	26

4 発掘写真は小島が担当し、航空写真については脚中央航業武田勉氏による。
5 本遺跡の資料は柏川村教育委員会の責任の元に保管されている。
6 発掘調査にさいし、次の方々から御指導御助言をいただいた。記して感謝いたします。
新井房夫、井上唯雄、梅沢重昭、坂爪久純、鹿田雄二、白石太一郎、徳江秀夫、土生田純之、前原豊、右島和夫、山崎一、村土地改良区、第6工区工事役員。

## I 発掘調査に至る経過

柏川村は、昭和 54 年度より、県営土地改良事業が実施され、それに伴って埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施してきている。昭和 57 年度はその 4 年目にあたっている。

昭和 57 年度は、その年、圃場整備事業が着手されることになっていた。第 6 工区（勝・中地区）、第 8 工区（上東田面地区）及び第 12 工区（新屋地区）の 3 工区について、4 遺跡の発掘調査と、1 地点の試掘調査を実施した。第 6 工区（勝・中地区）では、本書に示す白藤、新宿遺跡の他に、古墳時代後期初頭の祭祀遺跡として周知されていた、中町遺跡の調

- 1 白藤・新宿遺跡
- 2 中町遺跡
- 3 白音寺遺跡
- 4 京塚遺跡



第 1 図 昭和 57 年度調査遺跡

査を行った。第8工区（上束田面地区）では、平安時代の集落址である、自音寺遺跡の調査を実施した。又、第12工区内では、道水路部分について試掘調査を行なった。しかし、ここでは、明確な遺構を伴う遺物の検出ができなかった。

白藤・新宿遺跡は、勢多郡柏川村大字白藤、<sup>セタラフリ</sup>新宿、八幡、太門、という4つの小字にまたがる、

270,000 m<sup>2</sup>にものぼる広大な遺跡であり、縄文時代前期より、鎌倉、室町期、あるいは江戸時代までの遺構、遺物を出土する内容の豊かな遺跡である。

この遺跡の所在する耕地区は、柏川村の東端、新里村と境を接する地域である。現在、柏川村を東西に横断している上毛電鉄の線路あたりを南限とし、県道桐生・前橋線から北へ上る村道2号線を西限と



第2図 白藤・新宿遺跡周辺地形図

する地域である。

白藤・新宿遺跡は、この膳地区の北端、現在、県指定史跡となっている、膳城跡の北にひろがる台地上に確認された。標高は 190 m から 200 m にかけての地域である。

この白藤・新宿遺跡はそれまで、上毛古墳總覧には柏川村 71 号墳から 76 号墳まで 6 基の古墳が掲載され、柏川村誌には土師器の散布地として周知されていた。又、現況の畠地割が非常に不自然なところがあり、膳城跡に関係する何らかの遺構があることが予想されるなど、埋蔵文化財が濃密に分布することが考えられた。その為、圃場整備工事に 1 年先行して、昭和 56 年 10 月より発掘調査に着手し、昭和 58 年 2 月の発掘終了までの 1 年 4 ヶ月を要し調査を実施した。この間に確認された遺構は、膳城跡北郭の戦場や、40 基を越す、大古墳群などであった。

## II 発掘調査

発掘調査はその対象地を道水路敷、あるいは上種カットのある地区とした。当初の土地改良側の計画では、この白藤・新宿地区ではほとんど土の動きがないとされていたが、工事が実施されるや当初の予想をはるかに越える面積の調査を余儀無くされた。

昭和 56 年度は白藤地区西側の道路敷部分の調査を実施し、昭和 57 年度は、新宿地区的道水路部分全域と、白藤・新宿地区で新たに土の移動ができた部分の調査を実施した。昭和 56 年度の調査及び昭和 57 年度の前半の調査は圃場整備事業着工前ということもあって、調査地区が幅 6 m の新設道路敷内に限定されたため、耕土作業及び埋戻しに、かなりの労力を用いた。

調査は対象地域が広範囲であるため、国家座標点（第 IX 系）X = 47000 Y = -54500 を基準点として 100 m 単位で大グリットを設定し A, B, C, D …… 区として、それをさらに 4 m 単位で、東西方向を 1 ~ 25、南北方向を a ~ y で呼称した小グリットを設定していく。そしておののの小グリットは、北西隅の杭を基準として呼称することにした。

したがって、これから、この概要を示すにあたって、この大グリットを単位として章をすすめていくこととする。

### (1) D, I, J 区の調査（第 3 図）

D, I, J 区は、白藤地区の北西部にある。D 区では昭和 56 年度に古墳時代末の横穴式石室を有する古墳（D-1 号墳）を一基調査し、昭和 57 年には、その周辺が土の切り盛りがでてきたため、新たに、D-2 号墳、D-3 号墳の調査を実施した。D-2 号墳は、D-1 号墳と同様に、前部を有する横穴式石室を主体部とするものである。これらは円筒埴輪等をもたず前部に円形の掘り込みをもち、その中に円碟を充填するものであり昨年度調査を行った月田古墳群の柏川 12 号墳などのあり方と非常に近似している。これらの 2 古墳は古墳時代後期末の終末期古墳として把するのが妥当であろう。D-1, D-2 号墳はいずれも上毛古墳總覧記載漏古墳である。

D-3 号墳は上記の 2 古墳とは異なり、一部破壊をうけているが竪穴式石室を主体部とするものと考えられる。又一部は道によって破壊をうけているが、周囲を全周された直徑 20 m 程の円墳である。この古墳周囲内からは円筒埴輪、馬形埴輪などの他、土師器や須恵器が検出されている。これらの出土遺物より、この D-3 号墳は 6 世紀中葉頃のものと推定される。この D-3 号墳は柏川村第 76 号墳と思われ、土地の所有者によれば、人物の形象埴輪もかって出土したとのことである。又、D 区では、浅間 B 軽石の純層をその埋土上層にもつ、大型の円形土塁が 3 基確認されている。これらは直徑 2.5 ~ 3 m、深さ 1.5 ~ 2 m 程のもので底にさらに直徑 0.5 m、深 0.5 m 程の円形の pit をうがったものや、30 cm 大の円碟をもつものなどがある。これと同様な土塁が、昭和 54 年度調査の稻荷山遺跡でも検出されている。稻荷山例は、やはり浅間 B 軽石を埋土上層にもち、埋土中央には焼土塊が検出されたもので地形的には平坦な面にのぞむ北向きの緩斜面であり、今回検出された土塁群と非常に近似している。又、周囲に同時期の住居址がまったく検出されないという共通点もある。

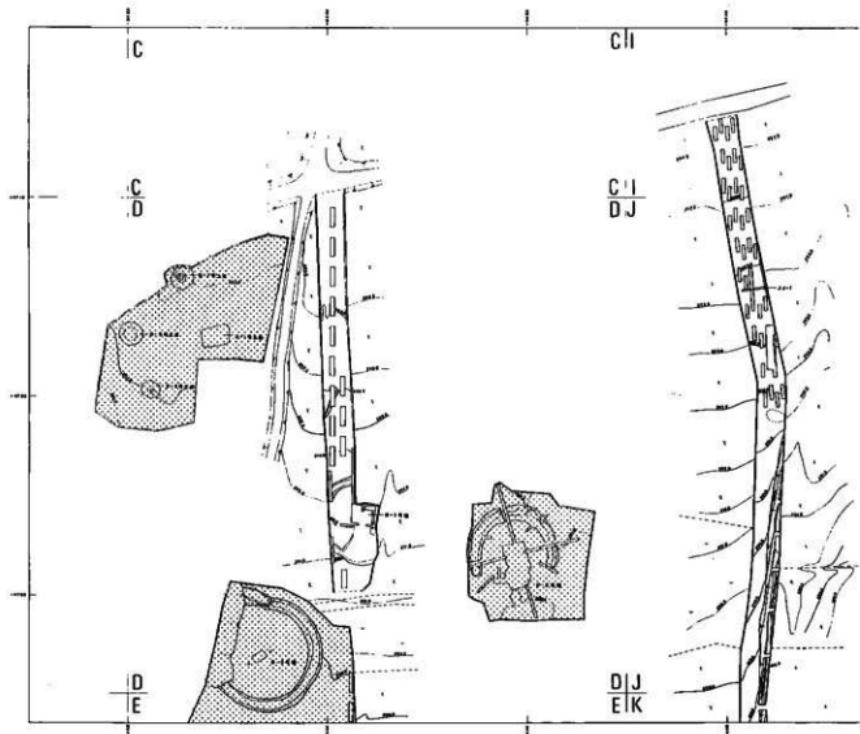
I 区では、上毛古墳總覧柏川村第 75 号墳に相当する直徑 30 m 程の円墳の調査を実施した。この古墳は主体部に大形の横穴式石室をもつものであるが、石室部はほとんど石を抜かれていた。周囲は、全周

せず、石室前には円形の掘り込みがみられた。又埴輪を有しない。この古墳もD-1、D-2号墳と同様、終末期古墳と考えられる。

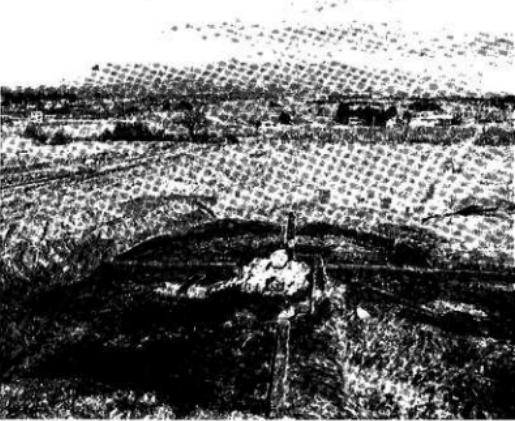
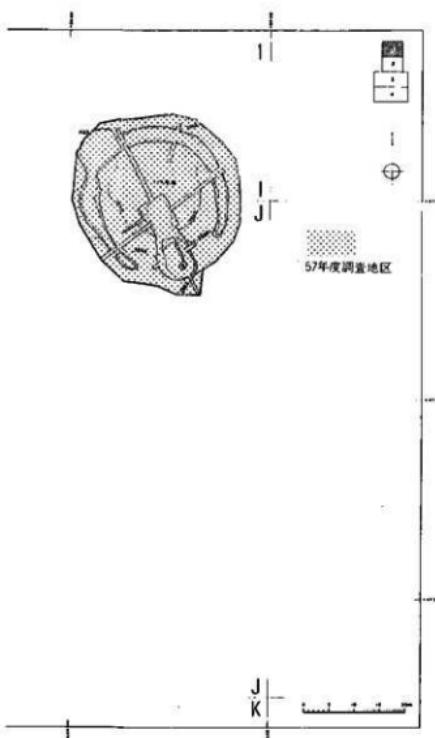
J区では、縄文中期後半加曾利E3~4式の土器片が多く出土したため、試掘溝を設定し、掘り下げた。しかし、住居あるいは土塹などの遺構は検出できなかった。ただ、大型伏せ窯と石組炉状の遺構が検出できただけである。



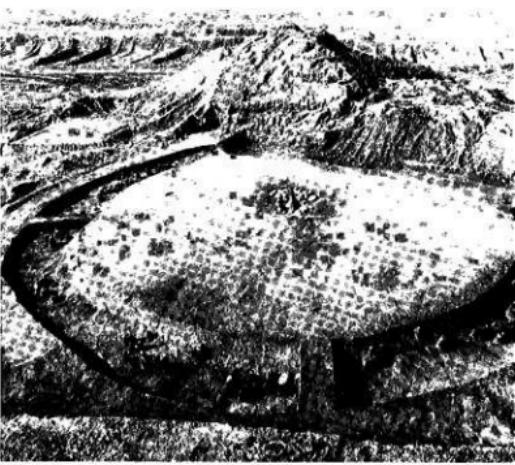
D区全景



第3図 D, I, J区発掘全体図



D-2号墳全景



D-3号墳全景



J区出土状態

## (2) E, F, K, L区の調査（第4図）

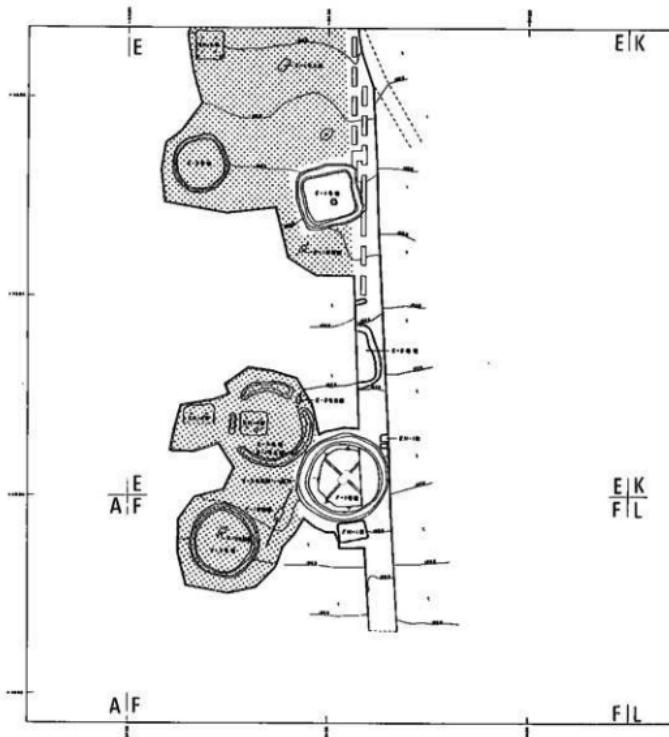
E, F, K, L区は、白藤地区的東南端部である。E, F区では昭和56年度に、方形周溝墓2基、円墳1基、住居址2軒を調査した。その後、57年度には円墳3基、小石棚5基、住居址3軒の調査を実施した。

ここで検出された方形周溝墓は、一基については全掘をすることができた。(E-1号墳)

周堀は非常によくしっかりと掘られていた。周溝内より土師器が出土している。しかし、主体部は明らかではない。

円墳は4基が確認されている。この内、F-1号墳は、56年度調査時に検出されたものである。この古墳は直径17m程の円墳であり、円筒埴輪を持ち、墳丘には葺石がはりめぐらさされていたようだ

ある。古墳中央には、小円碟を小口積にした豊穴状の小石棚がほぼ完全な形で検出されている。この石室からは小さな鉄片が一片出土したのみであった。しかし周堀からは、土師器、須恵器の鏡、石製模造品などが、転落した葺石や円筒埴輪といっしょに出土している。このF-1号墳に近接して確認されたF-3号墳及びE-4号墳は主体部は検出できなかったが、特にF-3号墳周堀埋土中には株名二ツ岳の火山灰FAが確認された。又、これらの古墳の間には、周堀等の外部施設を伴わない小石棚が検出されている。この小石棚には形態的な相違がある。F-1号墳の主体部のように、円碟を小口積にするもの、円碟一石を縦位置にもちい、床面に同様の円碟で敷石を用いるもの、床面に非常に小さな円碟をしきつめるものなどである。



第4図 E, F, K区発掘全図

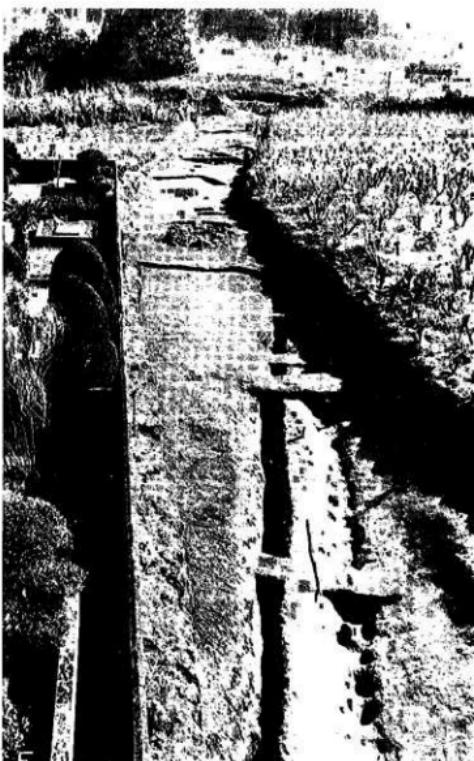
以上の方形周溝墓及び古墳は5世紀後半から6世紀中葉にかけてのものと考えられる。

K, L区では、溝1条、古墳時代中期後半から後期前半にかけての住居址4軒、終末期古墳1基が検出された。

溝は、出土遺物がないことから時期を決定することはできないが、現在、発掘区の東側にある竜源寺の地割りとその走行があること、この竜源寺の開基が、南に隣接している膳城と非常に深い関わりがあることなどが考えられることから、この竜源寺の寺城を削する溝ではないかという推定がなりたつ。ひるがえって、この竜源寺が、中世において居館址的な要素をもっていたのではないかということも想起されてくる。

4軒が確認されている住居址は、E, F区の住居址

とほぼ同時期、すなわち、和泉期から鬼高I期にかけてのものである。FH-1住からはモモの種子が検出されている。又、KH-2住、LH-2住からはF-1号墳から出土したものと同様な滑石製の石製模造品が出土している。



L区の溝状遺構（北より）





F-1号墳全景

直径 17 m 程の円墳、墳丘のまわりには砾石がはりめぐらされ、円筒埴輪が樹立されていたようである。墳丘盛土は全く確認できない。



F-1号墳主体部

30 cm 大の円礫を小口積にした竪穴状小礫塚である。



F区拡張区

56年度調査のF-1号墳のすぐ西側を57年に土の移動がでてきたため調査。古墳2基、小礫塚4基を検出した。

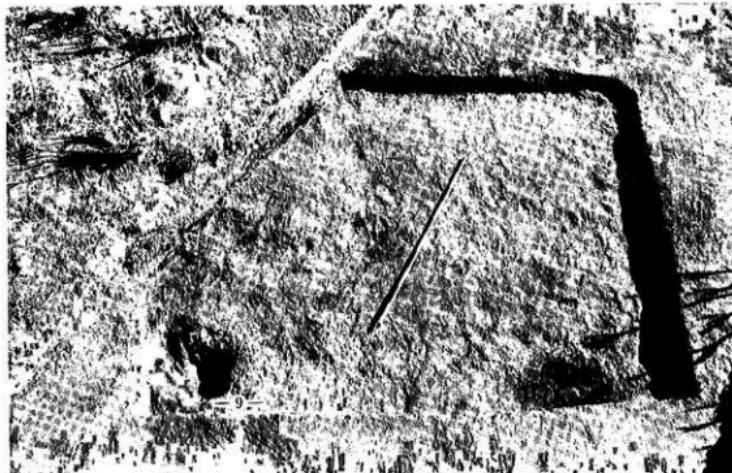
KH-2 住遺物出土状態

KH-2 住は長辺 5m  
短辺 3.5m 程の長方形の  
竪穴式住居址であり、ま  
わりに存在する住居址と  
主軸方向を一致させ、又  
出土遺物からも、和泉期  
後半の様相がうかがえ  
る。

遺物の出土は住居址北  
東隅に集中していた。



遺物出土状態  
北東隅の遺物出土状態



KH-2 住全景

(3) A, B, F, G, H, L, M, N区の調査（第5図、第6図）

第5図と第6図に示した、ABFGHLMN各区の調査は、F区の一部を除いて、すべて57年度に調査を実施したものである。これらの区域は新宿遺跡の範囲である。又、この区域の調査は大きく、古墳の調査、古墳時代中期後半から後期初頭にかけての住居址群の調査、中世、膳城址に関係する遺構の調査にわけて考えることができる。

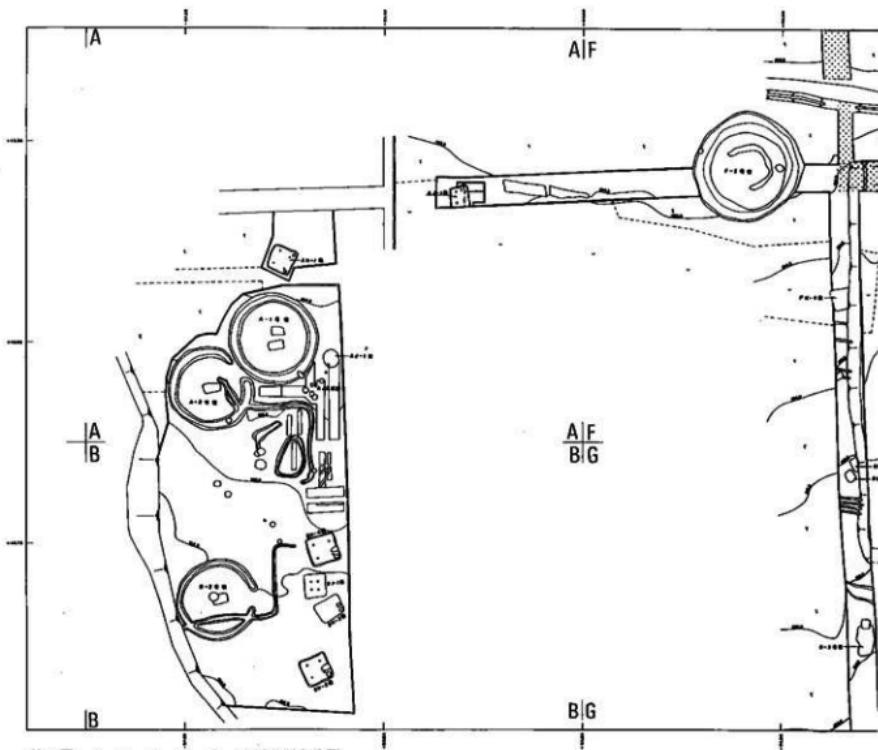
古墳の調査

古墳はこの区域の中で8基を確認している。その内、1基は周囲の一部分を調査したのみ、1基はほぼ完全に石が除去されてわずかにその痕跡をとらえたのみである。この8基の古墳は、終末期古墳として把えることのできる3基の古墳を除いて、他は6世紀中葉に比定できる古墳である。

A—1号墳は、白藤・新宿遺跡の古墳の中でもっとも副葬品に富む古墳である。直径は20m程の円墳であり、南北に並立する2つの主体部をもつものである。主体部はいずれも竪穴状小壁構造であるが、形態上に差異がある。北側に位置する1号主体部は側石はほとんど抜かれていたが、その痕跡から一石を縦位置に使用するとともに床に円礫を敷くものである。南側の2号主体は、円礫を小口積に3段に積むもので、床面には板状の石を敷いている。この2つの主体部からは碧玉製の管玉や硬玉製の勾玉などが多数検出されている。又、古墳周囲内からは埴輪類に混じって多数の土師器や須恵器が検出されている。他鉄製紡錘車、石製紡錘車、漆玉なども多く検出されている。

住居址の調査

A, B, G, H区は、発掘区の都合上完掘し得た住居



第5図 A, B, F, G, L, M区発掘全体図

址はわずかであるが、もっと多くの住居址を検出した地区である。この3地区合せて21軒の竪穴式住居と2棟の掘立て柱造構を検出している。これらはいずれも、その出土遺物から、古墳時代中期後半和泉期から後期前半鬼高I期にかけてのものであり、他にはわずかに2軒の古式土師器を出土するものがあるにすぎない。

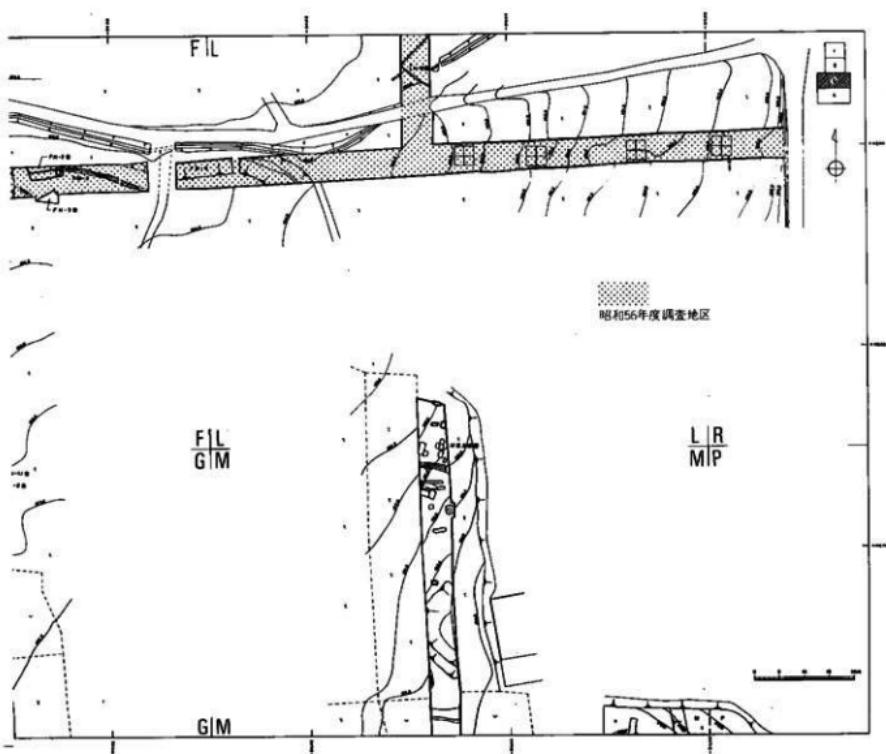
#### 勝城址に関する遺構の調査

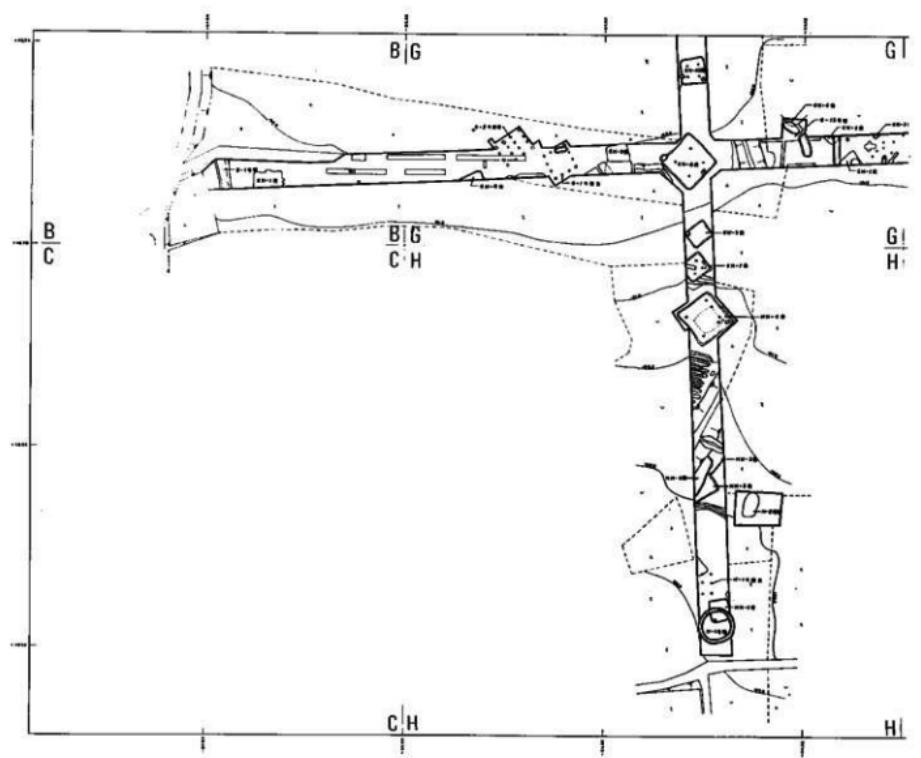
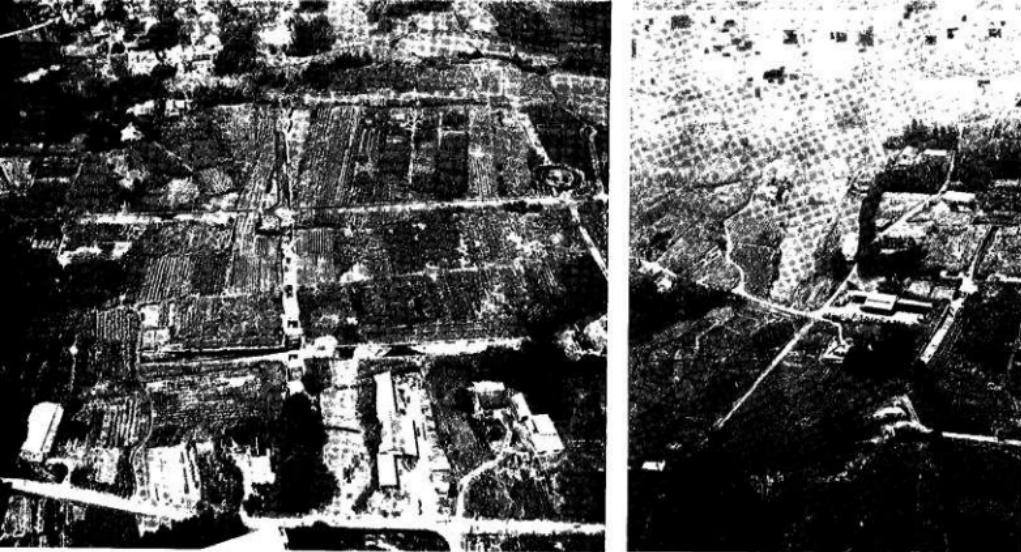
F区からG区にかけて南北に連なる大溝とM、N区で確認した勝城北郭の濠址がそれである。F、G区で確認された大溝は上幅7m、下幅1m、深さ2m程の大きなものでF区内で東西方向から南にまがり勝城西郭方向に向かって延びている。溝の形態は箱築研に近い形である。ちょうど、圓場整備前の畠の区割はこの溝をさかいにして、まったく異なった地割がなされていた。古老によれば、確認された

溝のあたりに、南北に土塁があったという。このことをきけばこの地割と溝の関係も容易に説明がつく。

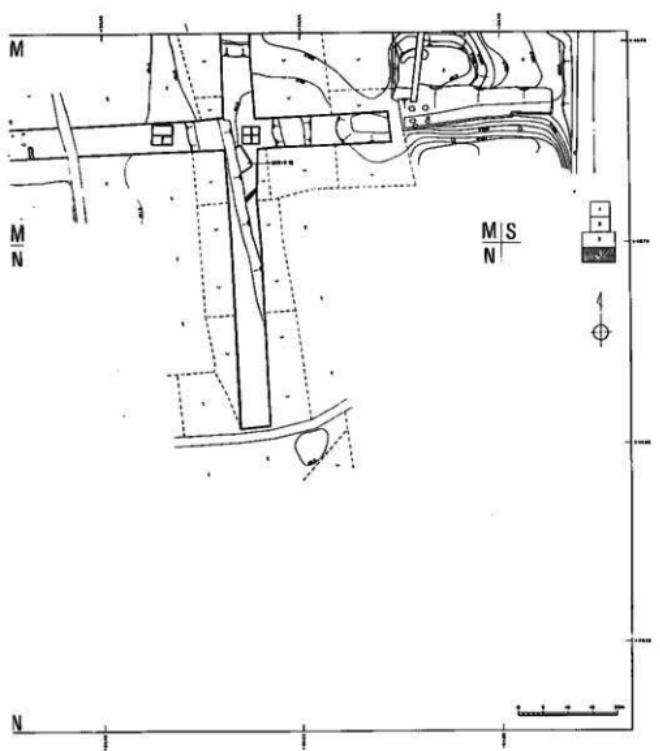
M、N区で確認された大溝は勝城北郭に伴うものであり、たがいに直交するものと思われる。特に注目されるのは、M、N区を南北につらぬき、勝城にいたる大溝の底面形態である。(第7図)それは、ちょうど、溝の底面にさらに2~3条の溝を掘ったような形態のものであり、全国的にも初めての確認例であった。<sup>註</sup>又、M区を東西に横ぎり、上述の濠に直交する溝中には、北部から城外に出る為の木橋の柱礎を検出した。(第8図)これも、まだ数例しか確認例のないことらしく<sup>註</sup>、この2つの事実は中世城郭史上貴重な発見といえよう。

註 山崎一氏御教示による。





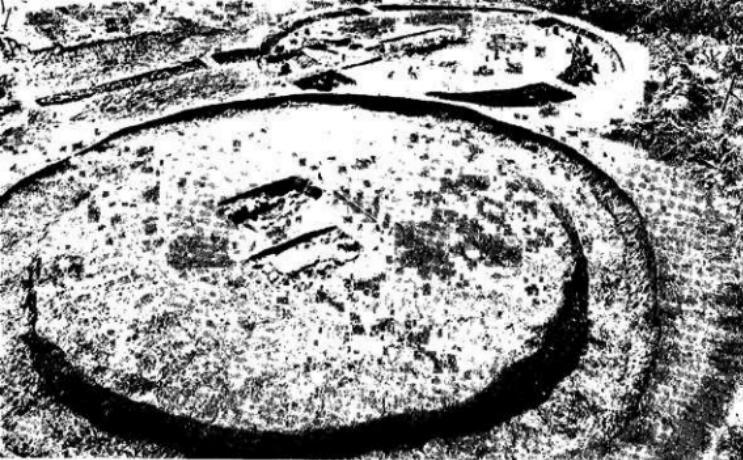
第6図 B, G, H, M, N-I危機全体図



#### 空から見た発掘区

A, B, F, G, H,  
L, M, N区は、勝城址  
の北側、新宿地区の大部  
分をしめている。農道一  
本をへだてて白藤地区に  
接している。

東より、北より、南よ  
り。



A-1号墳全景

A-1号墳の上方にA-2号墳が在る。この古墳はA-1号墳を明らかに意識して造られている。



A-1号墳周溝内の遺物出土状態

周溝、南西隅の状態である。上層には砾石と円筒埴輪、下層には土師器類が多くまとまって出土している。



遺物出土状態(拡大)

土師器の壺、高壺、壺などがまとめて出土している。

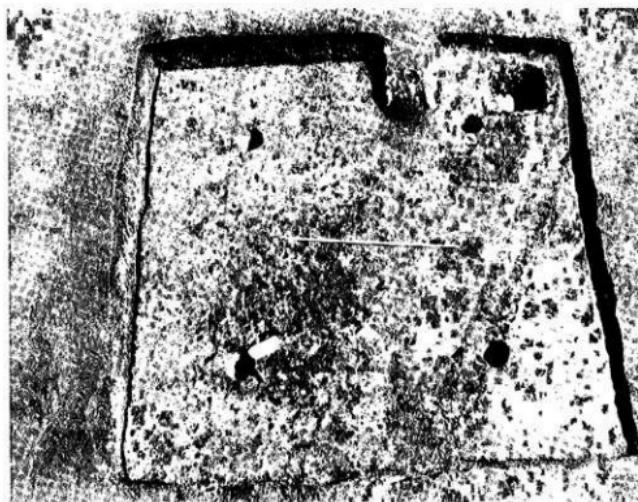
### B, G区全景

和泉期後半から鬼高Ⅰ期の住居址が多く検出されている。それらは主軸の方向をほぼ一致させている。



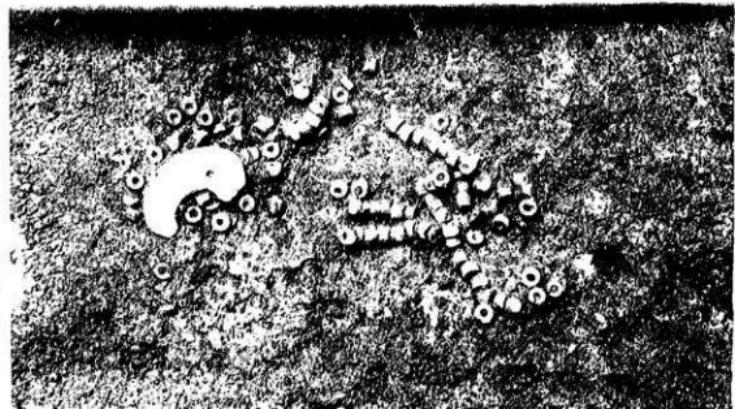
### B H-2住全景

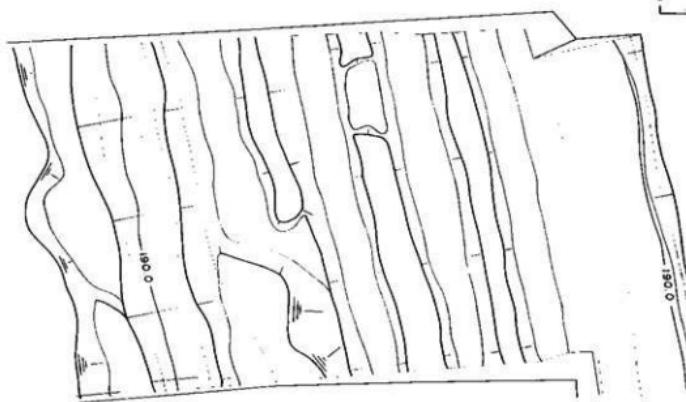
和泉期後半の住居址である。



### G H-1住出土の石製模造品

鬼高Ⅰ期の大形住居址床面直上から出土した滑石製の首飾り、ほぼ完全な形で出土している。





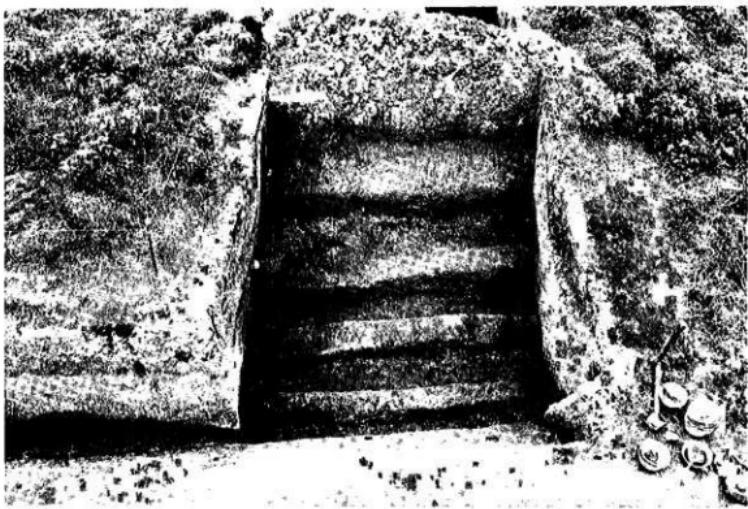
0 2m

第7圖 北郊，西涼古測河



北郭西濠遠景(北より)

西濠はまっすぐ本丸に  
むかっている。



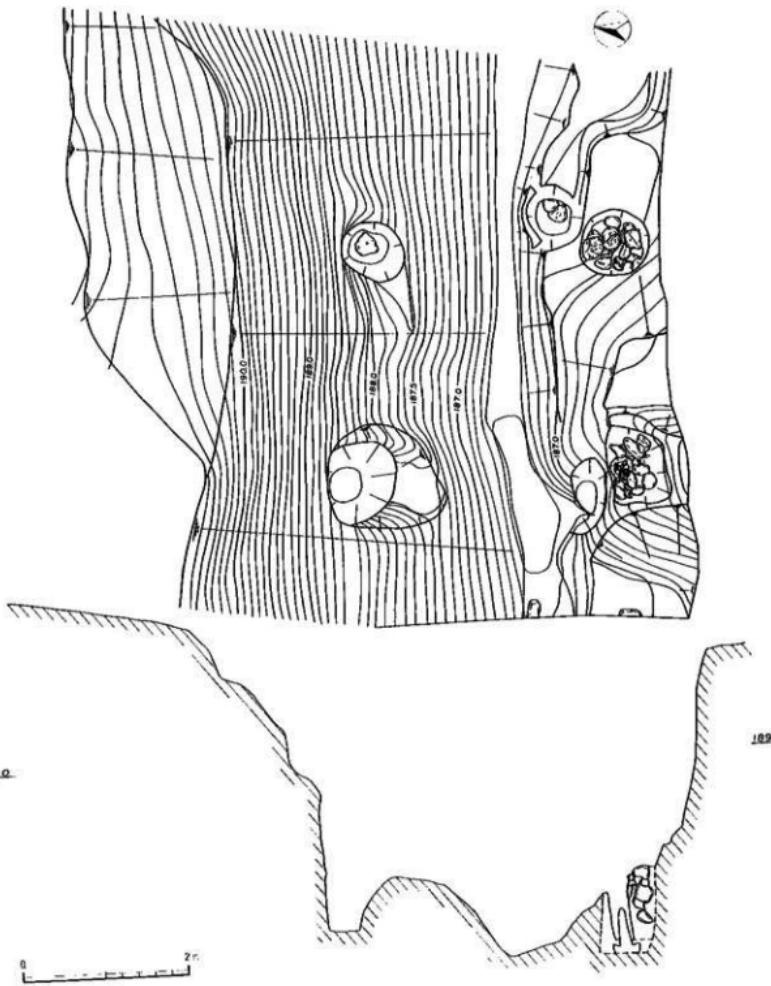
西濠、鉄堀全景

発掘区の都合で西濠で  
全掘できたのは、この  
一ヵ所だけだった。大き  
な濠の中に細い溝が平行  
に作り出されている。



西濠、鉄堀土層堆積状

況



第8図 北部、北瀬橋脚部分実測図



北郭北濠内横脚趾

東西に走る北濠が北に  
曲るすぐ手前に木橋の橋  
碑址が確認された。



北郭北濠全景

右が北郭内、左が城  
外である。北濠は岡中央  
で北に折れ、さらに 10 m  
程で西に折れて西濠とぶ  
つかる。

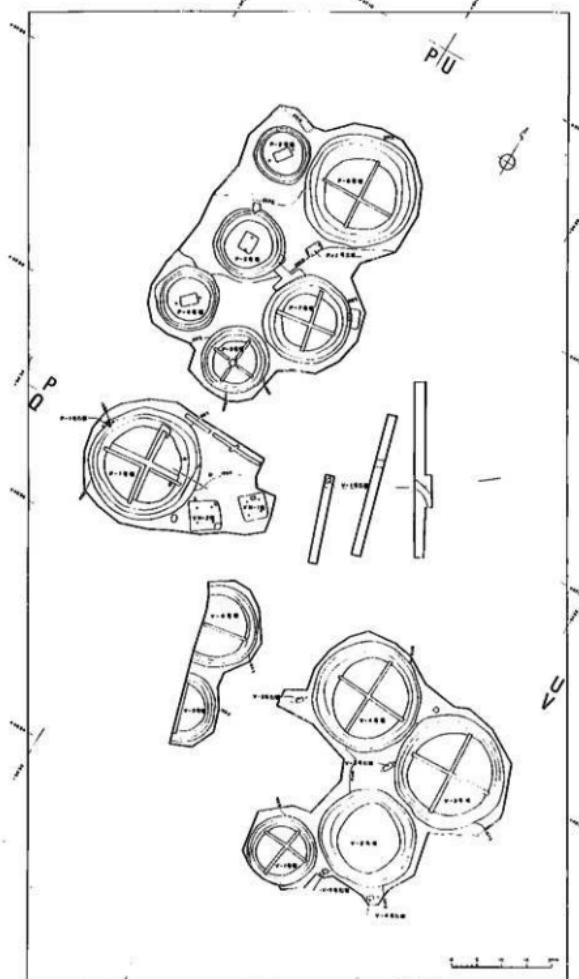
#### (4) P, V区の調査 (第9図)

P, V区は、白鹿遺跡の北東部にあたる。この地区からは、古墳が13基、小環郭が6基、住居址が2軒確認されている。

13基確認された古墳は、総て直径10m~20m程の円墳であり、葺石は認められなかった。これらの古墳の内、12基の古墳周囲埋土内には、株名二ツ店

給源の火山灰（FA）が検出され、残る1基については、周囲内の土層堆積の検討からはFA降下時にはすでに周囲が完全に埋りきってしまったもの、つまり、他の13基の古墳よりもさらに時代の古く遡るものと判断できた。これは、古墳からの出土遺物からも証明することができた。

周囲埋土内にFAを含む古墳は、さらに、主体部の有り方、埴輪の有無、古墳の大小などにより分類



第9図 P, V区発掘全体図

することが可能であるが、總じて小形の円墳であり、豊穴状の小礫部を主体部とする古墳は埴輪を持たないという傾向がある。

P-4号墳は、直径12m、ほぼ墳丘中央には長さ3.5m、幅2m、深さ1m程の土塙をうがち、小礫部を作り、その蓋石の上に30cm大の円礫を集積し、さらにその上を、ロームブロック混りの褐色土で被うという主体部が検出されている。この主体部中からは、わずかに残った頭蓋骨の一部を検出し得た。しかし、副葬品はまったく検出できなかった。

V-4号墳は直径22m程の円墳であり、主体部は検出されなかった。この古墳からは、円筒埴輪、馬形埴輪、土師器が多く検出でき、特に馬形埴輪は從来の群馬県下出土のものには類例をさがし得ないものである。

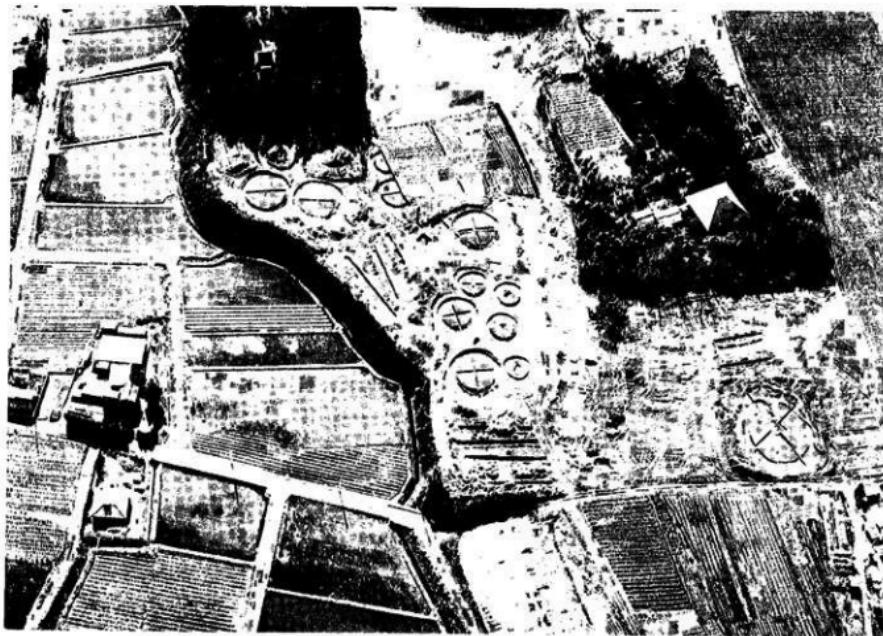
V-1号墳は、本発掘区中、もっとも南に確認された古墳であり、直径20m程の円墳である。この古

墳は白藤・新宿遺跡の中でもっとも古く位置付けることのできる古墳の一つである。

本古墳の主体部は、墳丘中央部に長さ4m、幅2m、深さ0.5m程の長方形の土塙を掘り、それからさらに、長さ3.5m、幅1m深さ0.7m程の土塙を掘り下げ、粘土層を置くものであり、主体内部からは鐵劍、大形鐵鉢、滑石製劍型模造品、小形の砥石などが検出できた。

古墳周囲内からは、円筒埴輪が多く出土している。又、和泉期後半と考えられる土師器の环や須恵器のI-2、3段階に対応すると考えられる無蓋の短脚高杯が出土している。

以上の古墳の他に5基の小礫部が検出されている。特にV区ではちょうど古墳と古墳との間に検出されている。本遺跡におけるこの小石部の在り方は非常に特徴的である。

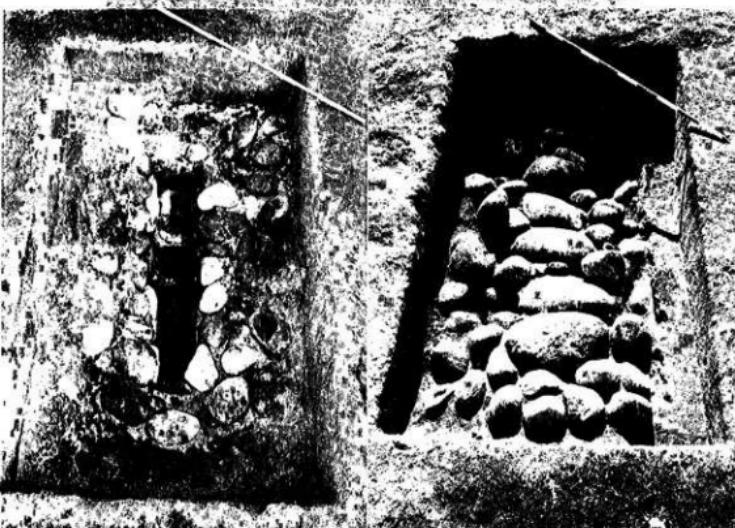


P, V区全景(北より)



P区全景（南より）

手前からP-1, P-5, P-4, P-7, P-3, P-6, P-2, 号墳, P-1号, P-6号墳には円筒埴輪が存在する。



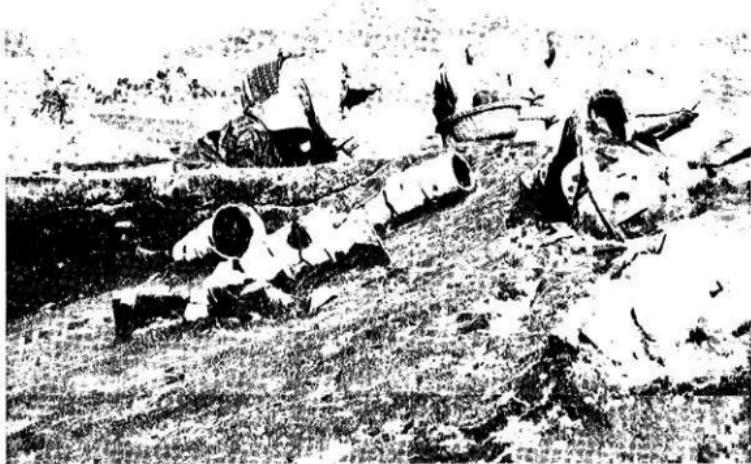
P-4号墳主体部

P-2, 3, 4号の各古墳には、主体部として小礫構が確認された。いずれも蓋石が完全な形で残っており、非常に残存状態のよいものであった。

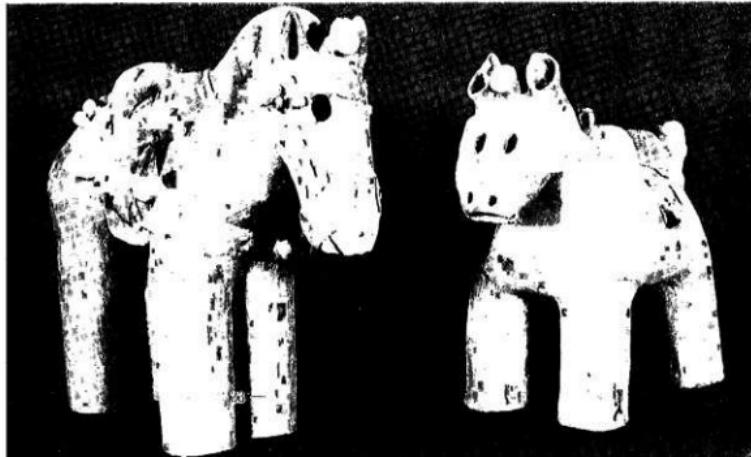
P-4号墳のものはその中でも特によく残っていたもので、被覆の状態などがよくわかる。石室内からは頭蓋骨の一部が検出されている。



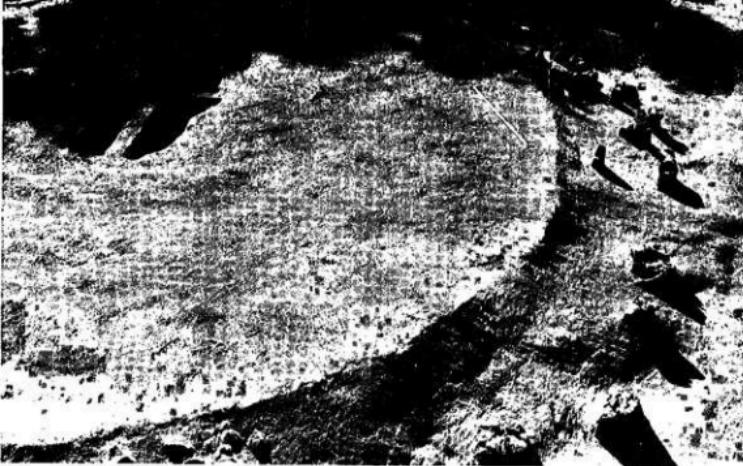
V区全景（北より）  
手前から、V-4、V  
-3、V-2、V-1号  
墳。各古墳との間には小  
礫部が存在する。



V-4号墳、埴輪出土  
状態  
円筒埴輪と埴輪馬の出  
土状態。



V-4号墳、P-6号  
墳出土の埴輪馬  
左がV-4号墳出土、  
右がP-6号墳出土のも  
のである。



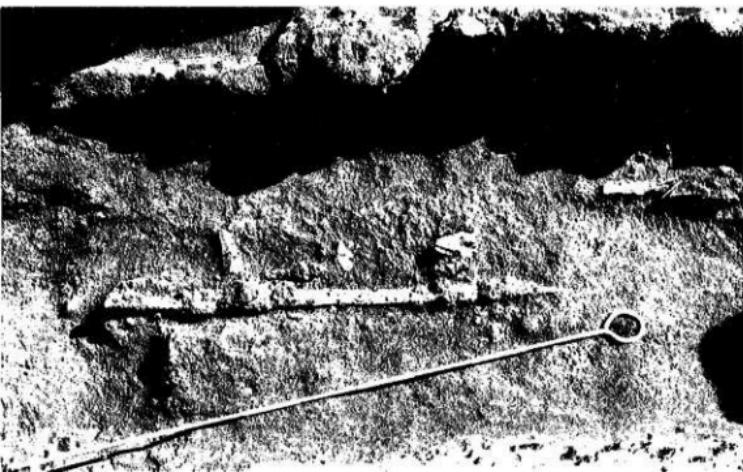
V-2号墳遺物出土状態

円筒埴輪が多数同埋内より検出されている。



V-2号墳主体部遺物出土状態

白色粘土を有いた粘土桶である。桶内からは鉄劍、刀子、大形平根鍔、携帯用砥石、滑石製劍形模造品などが出土している。



粘土桶内遺物出土状態  
近景

V—3号石槨上面

V—3号石槨は、V—  
2、V—3、V—4号填  
の間に確認されたもので  
ある。



V—3号石槨蓋石の状  
況



V—3号石槨蓋石除去  
後



### (5) Y, Z区の調査 (第10図)

本区は、白藤地区の最南端部にあたる。

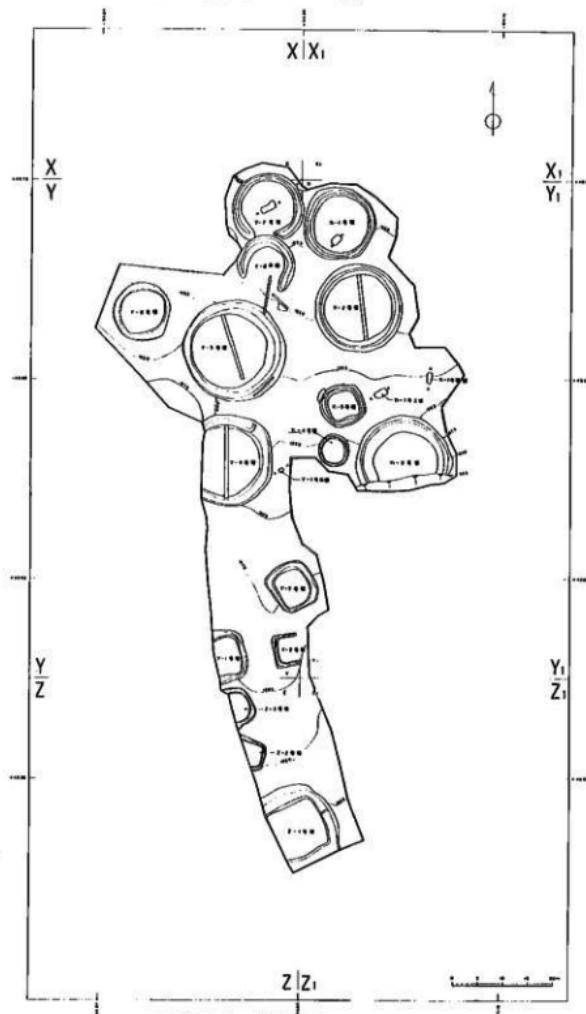
ここでは、方形周溝墓7基、円墳9基、小石擣2基、上埴輪1を確認した。

7基の方形周溝墓からは出土遺物はまったく検出されなかった。

9基の円墳はその周囲内埋土に榛名山・ツ岳・給源火

山灰 (FA) を含むものがほとんどであった。この中でY-5号墳には葦石が検出できた。又Y-6号墳周囲底からは、須恵器の樽形甕が出土している。

ここでは、上記の古墳とはほぼ同時期と考えられる土塙墓が一基検出できた。これは、長さ2.5m、幅1.5m、深さ0.8m程の隅丸の長方形のプランをもち底には円碟が一つと、うすく白砂が敷かれていた。



第10図 Y, Z区発掘全体図



Y-Z区全景（北より）

手前よりには6世紀前半代の古墳が集中する。

上方、南には、5世紀代の方形周溝墓群が存在する。



Y-6号墳出土の樽形鉢

Y-6号墳は、上面を圃場整備の重機により削平されてしまっていた。

その為、内部施設などについては不明な点が多い。しかし、周壠底よりこの樽形鉢がほぼ完全な形で出土した。

### III 成果と問題点

白藤・新宿遺跡は東西を神積地に挟まれた、赤城山から延びる台地上に広がる遺跡である。遺跡の中央には浅い谷が入り込み、その谷をとり囲むように遺跡は広がっていた。

この遺跡に対し、今回の調査は圃場整備事業に係る緊急調査ということであり、けして十分な調査ではなかったとは思われない。しかし、今回の調査では広大な遺跡地のなかに、道路敷地内とはいえ、縦横の試掘溝を打つことができた。これにより、本遺跡の大要を把握することができたと考える。未だ遺物整理等がほとんど進んでいない状況であるが、白藤・新宿遺跡における土地利用の推移を概観し、本概報のまとめとしたい。

今回の調査で明らかになった遺構は、住居址、すなわち、居住域であり、古墳群、すなわち、墓域と呼ぶことができよう。

#### 居住域の変遷

本遺跡では、縄文時代早期の押形文土器が數片検出されていることから、すでに縄文時代早期に人間の生活が開始されることとなる。しかし、これは非常に希薄な存在である。より明瞭に人間の生活地を見出せるのは縄文時代前期黒浜期からである。この時期は住居址、遺物等の分布は、遺跡内にまばらに散在する存在であり、居住域を形成するには至っていない。それ以後、縄文中期に、新宿地区西端に住居址と土塙群を若干伴う一群がある他、やはり散在的であるが、遺跡地中央の谷をとりかこむような遺物の分布の集中がみられる。白藤・新宿遺跡は、縄文時代、弥生時代を通して、人間の生活の表舞台には表われてこない。

しかし、古墳時代になると、新宿地区南部に住居址が形成され始め、古墳時代中期後半から後期前半すなわち、和泉期から鬼高Ⅰ期にかけて、住居址が飛躍的に多くなる。しかも、これらの住居址群には南北2つのまとまりを想定することが可能であり、在続期間も總て和泉期末から鬼高Ⅰ期という限定期間内で形成され終焉を見ている。この時期以降、中世の膳城構築による大規模な地形改変が行なわれるまで、ほとんど、人間の生活の場としては利用さ

れないのである。

#### 墓域の変遷

白藤・新宿に広がる古墳群の変遷は、古墳時代中期中葉頃に東側台地上に古墳が築造されるのを契機として、6世紀前半までに、すなはち、FA降下前までに東側の台地は、古墳で埋めつくされたようである。東側台地上には2軒の和泉期の住居址が確認されているが、古墳が造られることによって、それ以後の住居址はまったくこの台地上には作られない。すなはち、居住域が墓域に変化していったのである。東側台地に古墳を作る余地がなくなると、すでにこのころ居住域として使用されなくなりつつある西側台地の西縁辺部に古墳を作り出す。これは、東側台地の古墳に比べ西側台地の古墳が出土遺物からみて時代的に下がる傾向があることから推定できよう。ほどなく、西台地西縁辺も古墳でうめつくされようとするところ、すなはち、鬼高Ⅱ期の頃、古墳はこの白藤・新宿から姿を消すのである。そして、再び、古墳時代終末期には、それまで白藤・新宿の古墳には見られなかった、前底部を持った横穴式石室を有する古墳が、前段階のように、密集せず、散在的に作られることになる。

以上のように、本遺跡における、居住域と墓域との関係は非常に有機的な関係であったことが推察できる。これに、生産域の変遷を覚えることにより、当時の人間のより動的な姿を把握することができるだろう。今後の大きな課題としたい。

又、今回検出された40基程の古墳は、ほとんどがFA降下前後、わずかの間に形成されたものであり、しかも、主体部に蝶桟あるいは土塙墓を有し、副葬品をほとんど持たないという非常に等質的な内容をもった古墳群である。これは渋川市空沢古墳群や境町下瀬名古墳群などと共に群馬県における初期群集墳を考える上で非常に貴重な資料を提供してくれた。これはひるがえって、当時の東国の大社会構造を考える上からも恰好の資料であるといえよう。

今後の詳細な資料整理後の本報告をまって論を進めたい。

白藤・新宿 C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>  
柏川村文化財報告第4集

---

発行日 昭和58年3月

編集発行 柏川村教育委員会

群馬県勢多郡柏川村西田面194

印刷者 ㈲小林印刷所

---

---